
本屋の店長のクリスマス

竜騎士そらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本屋の店長のクリスマス

【Nコード】

N6699P

【作者名】

竜騎士そらら

【あらすじ】

クリスマスの夜の、とある大型書店の店長のお話。

どこにいても、どこに目を向けても同じような光景。街中どこでも、トナカイと赤い服の紳士。あるいはLEDとキラキラのモールが絡まったモミの木。ヒイラギにポインセチア。そうとも、街はクリスマスという一大イベントに染まり、一部の人々は浮かれている。ああ聖夜。街は等しく一色となるが、人はどうだろうか？ 人生は決して平等ではなく。その差が如実に表れるのがこの夜だ。予定のある者と無い者。友なり恋人なりと楽しい時を過ごす者とひとり孤独に耐える者。その違いが容赦なく突きつけられる夜なのだ。ああ聖夜。罪作りな夜。

人の行き交う街の入り口は、鉄の箱が行き交う巨大な駅。その駅の構内に、やはり巨大な書店が鎮座している。広大な面積を誇る売り場の中にありとあらゆる種の本が存在するこの書店は、多くの人間がすれ違い、出会いふれあう場所としても知られている。

本来なら書籍を売る場所に過ぎないこの店が、なぜ人の交流を助けるようなことをするのか。それは、この店の店長に秘密があるのだが……………

「ねー店長、なんでクリスマスなんかに関心がないんですかー？ たまには休みましようよー。せつかくのクリスマスですよ？」

クリスマスイブの夜、店内の一角。店のロゴが描かれたエプロンをつけた若い女が、同じエプロンをつけたこれまた若い男に話しかけた。男——店長——は表情を崩さず淡々とした口調で、

「さつきからずっと同じこと言ってますね。……そんなに休みたいのなら、仕事休んでもよかったのに」

「そういうんじゃないんです。店やってたら仕事したくなるじゃないですか。お店ごと休みがいいんです」

「そういうわけにはいきませんよ。クリスマスはお客さんが来る時期なんですから」

「……そうですか？ 本当ですか？」

「……………」

周りを見渡しても、広い売り場スペースに客の姿はまばらだ。

「……でも、お客さんはいるわけです」

「それはそうですが……いえ、なんでもないです」

「ところが、あなたの言いたいこともわかります」

全く表情を変えないまま、店長は続けた。どっちですかと突っ込む店員は無視だ。

「たしかに、客はこないです。クリスマスなんて、知り合いと一緒にさわぐか、恋人と同じ時間を過ごすか、珍しいですが教会で静かにするものですから。それができない人は、ひとりで過ごすことになります……いずれにせよ、こんな日こんな時間には本屋に来ません……だから、いつもに比べて客足はまばらです」

「さつきと言うことが真逆です」

当然、そんなこと無視だ。

「ですから、今日はあんまり人手がいりません。実際休んでるバイトくんも多いですね。あなたは真面目に仕事してますが」

「ええそうですね。どうせ私は、クリスマスに予定のひとつも入ってないような、つまらない人間ですよ」

「なるほど。リア充爆発しろ、ですね」

「はい？」

「ネットスラングですよ。ネット上ではなく現実世界での生活——特に、対人関係——が充実している人間をリア充と言い、リア充ではない人間がリア充を冗談めかして嫉妬心を表すのに使う言葉です」

「そうなんですか」

「……ところで、この言葉を聴くたびに思うのですが……この爆発って、どういう爆発なんでしょうか？」

「……………はい？」

何を言ってるのか素で分からなさそうな顔をする店員。店長はまったく気にせず続ける。

「つまり、火炎が伴うか伴わないかです。内圧が上がって破裂するイメージか、火柱を上げて爆発炎上するイメージかのどちらかということです」

「そんなのどっちでもいいんじゃないですか？」

「個人的には後者が好きです。火柱って、なんかいいですね。物が燃える光景も好きです」

「本屋さんがなに言ってるんですか……」

「そしてこんなことを考えつきました。クリスマスの夜の繁華街で、テロリストの仕業によってリア充が突然爆発するんです。偶然その場に居合わせた刑事が事件の裏に恐るべき陰謀を嗅ぎ付け、次の爆発を阻止し人々の平和を守るために闘うというストーリーの映画。

タイトルは……そうですね、『沈黙のリア充』なんてどうでしょう。主演はスティーブン・セザール、監督はスティーブン・スピルハンバーグでどうでしょう？」

「どこから突っ込んでいいかわかりませんが……とりあえず、なんでも映画の話になってるんですか？」

「あなたがリア充の話をするからですよ」

「まさかの私のせいですか。じゃなくて、リア充の話をしてたのに、店長がいきなり映画の話にもっていったんですよ」

「ええ。ですから、リア充が爆発するという映画が……」

「あるっていう店長の妄想ですね！」

「……まあ、そうです。にしても相当怒っているようですが、仕事するのが嫌なだけなんですか？」

やはり表情を変えずに問う店長。店員も店員で思い当たる節があ

るのか少し惑ってから、

「ええ、まあ、他にも理由があるにはあるんですが。それが……」

「あなたの嫌いな、ちよつとチャライバイトの男がクリスマス合コンだ」とか言いながら休んだからでしょう？」

「！？」

「図星みたいですネ。まあ、彼も散々言っていましたからね。ひとりごとを。『あー、忙しくてつれーわー。クリスマスにまで合コンの予定入ってマジ忙しいわー』って」

「ええ。本当にムカつく野郎です」

「まさにリア充爆発しろ、ですね。……では、こう考えてみてはどうでしょう？　彼は、クリスマスに合コン行かなければならないんです」

「え？　まあ、そうですね……」

「つまりです、彼はせつかくのクリスマスに恋人と一緒に過ごすでもなく、それどころか恋人を見つけるのに必死になってるわけです。

……愉快だとは思いませんか？」

「思いません！　それでも仕事してる私ほどみじめじゃないですよ！　……もういいです。どうせ店長には私の気持ちなんてわかりませんよ」

「……そうですか」

肩を落とす店員に、かける言葉は無い。店長は一瞬考えた後、店内を見回して、

「それにしても、客が少ないですね。本屋にとって、クリスマス当日ってなかなか無意味ですよネ。クリスマスプレゼントに本を選ぶ人はいるかもしれませんが、この日に買うひとなんていないでしょうし、本屋ですからクリスマスセールもできませんし」

店長の視線の先には、山と積まれた白い本。表紙には青い色の半円が描かれていた。その上に『HAGEROU』とタイトルが書かれている。

「有名な俳優さんが書いて文学賞をとったと聞いて大量に入荷したんですが……売れたのは二、三日だけで、その後はさっぱりですね。なんとかさばけるでしょうか？」

「おもしろくないんですか？ まあ、ネットとかの評判は散々みたいですけど」

「ネットの言うことを簡単に信じちゃいけませんよ。いろいろ書いてありますが、あれらの大半は読みもせずおもしろがってかいてるだけです。私はちゃんと読んで、内容をよく吟味してひどい作品だってブログに書きました…… ケータイ小説とたぶん同レベルかちよつと上程度でしょう」

「結局ひどいんですね。しかも、店長の嫌いなケータイ小説を出してきますか」

「ええまあ。あんなもの売れない方が世のためです。経営者的には在庫分ぐらいいは売れて欲しいものですが」

「なんというか、葛藤ですね……」

「まあ、いざとなれば在庫全部燃やしますが」

「マジですか……」

ドン引きする店員。まあ、当然の反応だろう。

「さすがに燃やすのはないですが、なんとかして売れないものでしょうか」

「ポップとか作るのはどうですか？ どんな本か知ってもらうことで売れるってよくある話ですよ」

「もう作って、置きましたが…… さっぱりです。私が思ったことを素直に書いてみたんですが……」

「ちよつとまってください。思ったことって……現物みせてください」

平積みされた白い本の前まで来たふたり。店長の言う通り、卓上スタンドに宣伝文句が書かれていた。『1,400円も出す本じゃありません。他の本を買った方がお得でしょう』

「これじゃあ売れるわけないじゃないですか！」

「でも、嘘は書けませんよ」

そう言いつつ、ポップを撤去する店員を止めようとはしない店長。正直、なにか変だとは思っていた。

「もういいです。この本の宣伝は私がやります。店長は口出ししないでください」

「……………はい」

たぶんそれがいい。が、なんとなく気に入らない。

「……………じゃあ、さっそく売ってみてください。たとえば、あのカッブルに」

そう言った店長の指先には、今まさに入店した若いアベックに向けていた。

「……………店長。お客様を指さしちゃいけません」

「あのふたりの素性、どう見ますか？」

「そうですね……………」

店長の手を無理に下ろし、件の客を見つめる店員。見るのは一瞬でいい。

「ここに来るのは初めてみたいです。クリスマスに街中で遊びに来て、彼女の方が大きな本屋を見つけてちよつと寄ってみよう、とずっと探してる本があるかもしれないからでしょう。彼氏の方は、せっかく立てたデートプランが乱れそうでイライラ」

「なるほど。さすがです」

ほかのことはともかく、彼女のこの、天才的な洞察力はすばらしい。

「つまり、読書が好きではない男と、それなりに熱心な女ですね」

「いえ。違います」

「……………そうなんですか？」

「ええ」

「それはどういう？」

「自分で確かめてください。ほらほら」

店員に背を押された。まったく……。

「こんばんは。なにかお探しでしょうか？」

カップルに近づいて声をかける。相手は少し驚いたようにこつちを見た。いつものことだ。客から話しかけることはあっても逆はあんまりない。それがこの店の特徴なのだが。スタッフが積極的に話しかけ、書物を紹介して宣伝する。

「えっと……？」

「あの、ひとつ訊きたいんですけどっ」

男は戸惑っているが、女の方はよかったとばかりに返事をしてきた。

「はい、なんでしょうか？」

「ケータイ小説って、どこに置いてあるんですかつ！」

「……………」

なんてこつたい。

それでも客は客だ。怒りを押さえてケータイ小説の棚まで連れて行く。ピンク色の背表紙が妙に目立つ、居心地の悪い空間だ。ところがその女は臆することなく近づき、目当ての本を探し始めたようだ。スイーツ（笑）。その後ろでは。男が渋い顔をして彼女の様子を眺めていた。

「本はお嫌いですか？」

他にやることもないので話しかけてみた。男はその表情のままこちらに顔を向け、ばつの悪そうな表情になって、

「いえ……嫌いじゃないです。むしろ好きですが……こついうのは……………」

ピンク色の本の群れを顎で指す。

「そうですか。それはよかった……ちなみに、どんな本が？」

「海外の推理小説が好きですね。古典はあらかた読みつくしたので、最近はおっぱら新作ばかりですが……」

「そうですね……よかったらウチの本棚見ていきますか？ 数を揃えてるので、未読のがあるかもしれません」

「ほんとですか」

その男の表情は、どこまでもいきいきとしていた。

「ええ。ご案内します……」

それからしばらく、ミステリー談義でずいぶんもりあがった。海外ミステリーの品ぞろえも彼を満足させるのに十分だったらしい。何冊か買ってくれた。こういうことがあるから、書店はやめられない。

女の方はよくわからない。まあ、たぶん読みたい本はあったと思う。あれはあれで、数はそろえてあるから。

「ね？ 彼氏がイライラしてたのは、時間の問題だけじゃなかったでしょう？」

店員の所に戻ると、彼女は勝ち誇ったような表情をしていた。まあ、たしかに彼女の言うことは正しかったのは事実だ。

「まったく、さすがですね。あなたのその洞察力は……彼氏さんは、彼女の趣味が嫌いなようでした。なのに彼女がマイナーなケータイ小説を探し始めてイライラ……」

「でしょう？ あ、あと『HAGEROU』二、三冊売れました。やっぱあのポップが全部悪かったみたいですね」

「そうですね……それはよかった」

「という割には、あんまりうれしそうではないですが」

「売れて欲しい内容の本ではないですから」

「いえ、あいかわらず無表情ですねと思ったわけですが……」

「……………あいかわらず、癪に障る人ですね」

しかし彼女のおかげでいろいろ助かることがあるのも事実だ。まったく、難しいものだ。

「……………そうですね。ものは相談ですが……………クリスマス、したいですか？」

「……………クリスマスを『する』ってどういう意味ですか？」

「まあ、そのままの意味です」

店内には彼女の他にも多くの店員がいた。せつかくのクリスマスだというのに勤務している働き者だ。

「まあ、がんばってる皆さんをねぎらいたいと思ったわけです。そうですね……………ケーキでも買ってきてください。仕事が終わったらみんなで食べましょう」

紙幣を何枚か、店員に渡した。彼女は目を丸くしてこちらをみつめ、固まっている。

「どうしました？ 私の考えが変わらないうちに早く行ったほうがいいですよ」

「え……………あ、そうですね。じゃ、いつてきます！」

そして店員は、一旦着替えるために店の奥に引っこ返もつとして、ふと店長の方に振り返って、

「メリークリスマス！」

満面の笑みでそう言った。ふむ、こういうクリスマスも悪くはないかもしれない……………。

（後書き）

こんにちは、そちらです。

クリスマスに合わせてなんかしてみようと思い立ち、こういうのも書いてみました。ちょっと変わった店長と、それにつきあう店員との掛け合い、楽しんでもらえたなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6699p/>

本屋の店長のクリスマス

2010年12月23日21時41分発行